
かわいい悪魔の言うとおり

ぱぴこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かわいい悪魔の言うとおり

【Nコード】

N6409V

【作者名】

ぱぴこ

【あらすじ】

天使のようにかわいいお顔と言われていた幼なじみはその態度も口もまるで悪魔のようにいじわるでわがままだけど、そんな総一郎のわがままをきくのが陽菜にとって昔から当たり前だった。高校生になって外見だけは王子様のように成長した総一郎が好きになったのは陽菜の友達で…。

靴下まではかせます（前書き）

初投稿なので、いろいろ微妙な点があると思いますがよろしく願
いします。

靴下まではかせます

中学生のころから地道に伸ばし続け、ようやく胸のあたりまで伸びた髪の毛は手入れも大変だし、何より朝には寝ぐせだらけで本当に大変だ。毎朝この時間は髪の毛を切ってしまうおうと決心するんだけど、美容室に行くといつも決心がつかずに結局そろえるだけになってしまう。

頑固なくせ毛仲間である実の父との兼用の最近見つけた最良と思えるヘアムースは、一応女性向けなのでパッケージにはさわやかなブルーにシトラスのような葉っぱが踊っている。

髪の毛のくせをごまかすように、コテで軽く内巻きにして前髪をととのえ高校生になってから始めたアイメイクを開始する。

うすいブラウンのシャドウをアイホールに軽くのせ、ダークブラウンで目の周りを縁取る。シャドウが濃すぎると学校で指導されてしまうので気をつけないといけない。先生が見逃してくれる程度のナチュラルなものにとどめておく。

ビューラーでまつ毛を念入りにカールさせ、しつこくならないようにマスカラを塗る。

今まで向かい合っていた鏡に、横顔をうつして我ながら芸術的な弧を描くまつ毛に満足する。

キャップをあけるとバニラのほのかな香りがする透明なリップをさっと塗って完成する。

朝はとっても苦手だけれど、これは必要な準備だ。

かばんをつかんで家を出ると、そんなに大きくない我が家のガレー

ジから自転車を引きずり出しながら携帯の発信履歴の一番上、“加藤 そういちろう”に電話をかける。

「総ちゃん、起きてる？今から家出るよ。」

長めの呼び出し音がぷつりと切れると同時に私は早口に言った。

『…起きてる。』

今はまだ絶賛お布団の中です。と教えてくれるその声には私は思わず笑みをこぼした。

ちゃんとした声でしゃべっていると思っっているんだろう。もう30分も前から電話の相手、総一郎の目覚しが5分置きに鳴っていることを知っている。高校に通いはじめてすぐ、朝起きられないと言う総一郎の携帯にその設定をつけたのはわたしだから。

「はいはい、じゃあね。」

総一郎が寝ていることにはあえて何もつつこまないまま、わたしは通話を切って携帯をまだ着なれていない制服のポケットにしまう。

総一郎の家はわたしの自宅から自転車で10分もかからない場所にある。歩くとそこそこかかるのでいつも自転車で向かう。

加藤家に到着すると、広い庭の片隅に自転車を停めて前かごに放り込んでおいたかばんを持ち勝手口から声をかける。

「お邪魔します。」

「陽菜ちゃん！総一郎さっき起きたところなの、まだ準備できてないみたいで。ごめんね上がって待っててやってくれる？」

その言葉を聞くか聞かないかの間にわたしはローファーを脱いで申し訳程度にそろえると勝手口から家に入り、ごめんねと呼びかけた総一郎のお母さんがいるはずのキッチンに向かう。キッチンダイニングに続く扉を開けて、顔だけをのぞかせる。

「おばさん、おはようございます。」

キッチンに立つ総一郎のお母さんの姿を見つけて、わたしは家では絶対にしないにつこりとした笑顔を浮かべる。「お外の大人の用」の笑顔だ。

「いつもごめんね？総、まだ自分の部屋なの。紅茶いれるから飲んで待ってて。」

うちの母親よりたしか3つほど年上の総一郎のお母さんは、専業主婦だというのに朝からちゃんとお化粧をしていて、肩より少し上のボブを上品な色に染め淡いグリーンのエプロンをして最近リフォームしたのだという対面式の台所に立っていた。まるで主婦向けの雑誌から抜け出てきたような光景だ。

「総ちゃん家の紅茶はおいしいから好き。」

やかんを火にかけながらおばさんにつこりと笑った。外国から輸入されたなんとかっていう高い茶葉で淹れられる紅茶は、普段ティーパックの紅茶しか飲む機会のないわたしにも違いがわかるくらいはつきりとおいしい。

おばさんがはお砂糖とミルクをたっぷりといれてくれる。高級な紅茶に申し訳ないけど、わたしはかなり甘党だ。

お礼を言っておばさんから紅茶を受け取るとダイニングのテーブルに座り、たちのぼる湯気に息をふきかけて紅茶を飲もうとした瞬間に、声が聞こえて来る。

「靴下ないんだけどー！」

総一郎の声だ。自分の部屋を探しながら声をあげているんだろう。おばさんがため息をつきながら、食器を洗っている途中で泡だらけだった手を洗いだすのを視界の端にとらえるとわたしはいそいで立ち上がった。

「わたし、見てきます。白いタンスの中に入ってますよね？」

「ごめんね、たぶん2段目の右に新しいの入ってるから。」

申し訳ない、というように唇をへの字にしながらもやさしく笑うおばさんにわたしも笑い返しながら、総一郎の自室がある2階へと足をすすめる。登りなれた木の階段を静かに、でも素早く駆け上がったすぐのドアを軽くノックする。

「総ちゃん、靴下みつかった？」

ノックの返事もきかずにドアを開けると、クローゼットをあけて中をのぞいている総一郎がいた。

クローゼットから顔をだしてこっちを振り返った総一郎は、不満そうに寄せられた眉に無意識だろうか突き出された唇。わたしがかけた電話の後いそいで用意したんだろう、寝ぐせのままの髪型だった。

「ない。」

「靴下さがしといてあげるから、髪の毛なおして。」

白いタンスは総一郎の部屋の一番奥にある。その2段目をあけるとパッケージに入ったままの新品の靴下があった。数足はいっているそれを見てわたしはちらりと総一郎に視線をやる。

ブレザーの制服の、白い襟もとから除くシャツは黒だったのでわたしはその中から黒を基調にした靴下を選び取ってタンスの引き出しを閉める。

「黒でいい?」

声をかけると、ソファーに腰掛け前のガラステーブルに置いてある鏡で髪の毛をセットしている総一郎はこちらを見ることもなくうんとうなずく。

パッケージを開き、中に入っている型紙と金属の留め具をはずして近くに置いてあったゴミ箱に捨てると、わたしはソファーに座る総一郎の元にひざまずいた。くるぶし丈のソックスをじゃばらに寄せて骨が浮かび上がる素足のつま先にかぶせる。わたしの行動に気付いたのか、総一郎が少し顔をうつむける気配がした。かかとを持ち上げて片足をはかせ終え、総一郎を見上げると学校では「王子様みたい」とはやしたてられている笑顔でこちらを見ていた。

「髪の毛、できた?」

「なんとか。」

もう片方の靴下を総一郎の手元に乗せて立ち上がろうとすると、渡したはずの靴下がまたわたしの手の中に戻ってくる。もう片方もは

かせろってことなんだろう。

反抗する気も起きなかったので、わたしはさっきと同じようにもう片方の足にも靴下をはかせてから立ち上がる。

まるでメイドのようなかいがいしさだ、と言っていたのは同級生の一人だ。

「ありがとうございます。」

につこりと笑ったままお礼を言う総一郎だけど、わざとらしい敬語が格別感謝していないことを告げている。

出会ってから10年以上。一緒に学校に通うようになってから10年目。総一郎に靴下をはかせることはわたしにとって格別めずらしいことではない。

そのあたりまえがうれしいんだ。誰よりも総一郎のそばにいたい、それが何よりも幸せだった。

「それより、その髪型かわいくねー。」

一生懸命整えた内巻きの髪の毛を総一郎は手ぐしでひっぱりながらまっすぐにしていく。

わたしの、朝の苦勞が…。

『天使みたいにかわいい』そう言われていた総一郎は、周囲の期待通り王子さまのようにかっこよく育った。

周りから甘やかされて育ったせいなのか、元来の性質なのかはわか

らないけれど、無自覚なわがままと自覚有りのいじわるな性格は高校生になった今でも健在だ。

そんなタチの悪いこの子の面倒をみられるのはわたししかない。

靴だつてしまいます

「おばさん、紅茶ごちそうさまでした！いってきます！」

ずいぶんと冷めた紅茶を行儀悪く立ったまま一気に飲みほして、空にしたカップを軽くすすいで食器洗浄機にたてかける。笑顔で手を振るおばさんにあいさつをしてからテーブルに置いてあつた総一郎のお弁当箱を手に取り、一足先に靴を履いて外に出た総一郎を追いかける。

結局、最初に予定していた電車じゃなく、一本遅い電車に乗ることになった。ぺたんこのかばんを持って先を歩いている総一郎に追いつこうと早足で歩くけど、なかなか差が縮まってくれない。脚の長さの違いだとはあまり認めたくないものでわたしの荷物が多いせいにしておく。

最寄駅には駐輪場があるにはあるけれど、よく自転車盗難事件がおこっているので近所の人はあんまり利用しない。私も駅から歩いてすぐの総一郎の家に毎朝自転車を預けている。

昔買ってもらったばかりの自転車がなくなつて、自宅とは反対方向にある川の中に私の自転車がつきささっているのを見つけたときの母の蒼白な顔は忘れられない。

駅の直前でやっと総一郎に追いつく。改札をくぐりスーツ姿のサラリーマンの後ろに並んで一息つく。自然と下がった視界の中に朝ちやんとセットした髪の毛が中途半端にうねっているのが見える。ゆるまき、なんてかわいらしいものじゃないな、と髪の毛を指にからめるように巻きつけてみたけど、朝のようなふんわりとした質感は戻らない。

髪の毛を“なおして”くれた人を睨みつけてやろうと横を向けば、猫っ毛なのにつやつやと美しい緑髪をレイヤーカットにして片耳にだけかけている。総一郎は一度も髪の毛を染めたことがないから、全然痛んでなくてうらやましい。せっかくきれいな黒髪なんだから染めないでねと今度お願いしよう、いやあえてそんなこと言ったら金髪なんかにしてくるかもしれないからもう少し言い方を考えよう。総ちゃん、黒髪がかっこいいねーとか、黒髪が一番似合うよ！とか、そんな感じだろうか。

人がもんもんとした思考にふけっている中、総一郎はおおきなあくびと一緒にこつちを見た。

「巻く的时间かかったのに。」

わたしのつぶやきにあくびのなごりの涙を目にうかべたまま総一郎は何度かまばたきする。こうしたちよつとした仕草のひとつひとつがかわいらしい。

「じくろつさま。」

わたしが髪の毛を直しているのを見て、総一郎のぼつてりとした唇が我慢できないというように、にやりとつりあがるのを見た。どうやら今朝の総一郎さんは上機嫌らしい。

髪の毛くらい、まあいいか。と思いなおしたところで、電車がホームに到着した。車両の中に詰まった人の数を見てわたしの眉が思わず寄った。通勤・通学ラッシュまっただなかの快速急行なので混まないわけがないんだけど、それでもタメ息が出てしまう。世間のサラリーマンは30数年も毎朝こんな電車に乗ると言うんだから、企業戦士どころか勇者か妖精じゃないだろうか。高校に通うのに乗

り始めて1ヶ月とすこし。いつまでたつても慣れる気がしない。

たくさんの人の中にちらほらとうちの学校の制服が見える。この電車は快速が止まる学校の最寄駅まで乗り換えなしで到着できる。でもこの時間は混雑するので少し早めに出て各駅にとまる電車で登校している生徒も少なくない。各駅停車なら座れはしなくてもこんなすし詰め状態にはならないからだ。入学以来、わたしもその電車に乗ろうとしているが、総一郎がなかなか協力してくれないので乗れることは少ない。

ぎゅうぎゅうの電車に乗り込みながら、もうすぐやってくる梅雨の時期から夏にかけてはもうちょっと早めに総一郎の家に行こう、と決心した。

電車が発車してすぐのぐらぐらとした揺れに耐えているわたしとちがって、総一郎はドアの近くの吊革を持って悠々と涼しい顔で立っている。身長が平均よりも少し（ほんつとくに少し、）低いわたしには、届きはしても腕と背中をピン！と伸ばさなければ握ってられない高さだ。荷物置き金の金網だつて、使えたためしのないわたしには鉄道会社の冷たさが身にしてみた。総一郎の持つ吊革のとなりが空いていたが、そんな事情で持てずにひたすら脚に力をいれてふんばる。

「陽菜、吊革持てば？」

自分の隣の吊革を示すように軽く肘をまげて総一郎は言う。持ちたくても持てないんだよ、と言ったところでそんなこと絶対にわかって言っている総一郎に同情させることだつてできない。わたしは押し黙って、つんと顎を突き出すように顔をそむけた。総一郎を飽きさせるにはこれが一番だ。

「うそうそ、しょうがないからつかんでいいよ。」

吊革をつかんでいない方の肩を少しこちらに差し出して総一郎はにっこりと笑う。目の前にある総一郎の二の腕あたりの上着を握って、わたしは口元がゆるむのを実感していた。

9個いじわるされたって、1つ優しくされたらその9個のいじわるの分も合わせて好きになってしまおうわたしはもう後戻りできないくらいにバカなんだろうなあと思う。

満員電車からやつとのことで降りて、駅から5分ちよつとの学校までの道を歩く。わたしと同じ制服を着た女の子たちが、総一郎のことをちらりちらりと見ているのがわかる。うちの総ちゃん、かわいしかっこいいしもうたまらないでしょう？と自慢したかったのはずいぶん昔で、今では公衆の面前でこの“王子さま”の隣を歩くのに神経を遣う毎日だ。みんなが幼馴染のようだった小学校・中学校とは違い、高校ではほとんどの人が総一郎の天使のようなお顔しか知らない。黙って歩いているこの子を見ただけで、手に負えないほどのわがまま悪魔だって誰が想像するだろうか。

わたしはゆっくりとまばたきして、くるとカールさせてマスカラをつけたまつ毛の重みを確かめる。総ちゃんのそばににいるのに、ちよつとでもかわいくいたいって思うことは自由だよな？

学校の正面玄関をくぐるとすぐに下駄箱が見える。全学年がいつしよくたに集められたそこから、学生番号を探しだすのは入学したてのころは大変だった。今ではもう場所を覚えてしまっているのですが、そこへ向かえる。神様のちよつとしたイタズラなのか、下駄箱の一番上の段にあるわたしの学籍番号が張られた小さな扉を開き、上履きを取り出す。背伸びをしても中身がはつきり見えないので、いつも手探りで出さないといけない。上履きの変わりにローファーをそこに収納すると、扉を閉じて上履きに足をつっこみながら総一郎の元に戻る。スニーカーを脱いだ状態でかかと部分の靴下をひっぱり上げている総一郎が目にとまる。スニーカーを脱いだときに一緒に脱げてしまったんだろう。わたしのくすくすという含み笑いは大きなチャイムの音にかきけされた。

それまで玄関でだらだらと歩いていた生徒たちもにわかに早足になる。予鈴ではなく、本鈴だからだろう。わたしはまだ靴下をなおしている総一郎に急いで駆け寄って、脱いだままになっているスニーカーを掴み総一郎の下駄箱を開ける。中から上履きを取り出してやつと靴下を直し終えたらしい総一郎の足元に上履きをそろえて置き、握ったままだったスニーカーをそこにつっこんだ。

「本鈴なっちゃったから、早く！」

1年生の教室が1階でよかった。上履きに足をひっかけて履いている総一郎を急かしながらなんとか担任の先生が来る前に教室に到着できた。よかった、と息をつき今朝かばんに入れたままだった総一郎のお弁当を取り出し、総一郎に手渡す。

「はい、これ。」

「あ、さんきゅー。いつ持ったの？」

赤チエックのお弁当箱入れにつつまれたそれに視線を落として少し驚いたように言う。

「お家出るちよつと前。」

お弁当の存在を忘れていたんだろう、そうかそうか、と納得したように言う。と総一郎は自分の席に座る。

廊下側の一番後ろのその席のちよつと対称の位置、窓側の一番前に私の席はある。

ちよつとでも居眠りしたらすぐにばれてしまうこの席はこの間のくじ引きで当たったものだ。とことんクジ運のないわたしは本当に神様に見放されているのかもしれない。

総一郎っていう天使の顔した小悪魔に出会ってしまったことって、そもそもが神様の嫌がらせだったんじゃないかな？くらいにわたしは思っている。でもそんな総一郎に夢中で一生懸命お世話してしまいうわたしってちよつと、いやかなり残念な子だ。

敬称はサマで

「陽菜、今日も快速で来たの？満員だったでしょう。」

椅子に座ったまま声のする方に顔を向けると、わたしの制服の襟を直してくれる川島 結香の手が目に入った。結香は高校に入ってからなので出会って1カ月ほどだけれど、とても仲良くしている。肩の位置で切りそろえられたまっすぐな結香の髪がさらりと揺れる。細くてからまってしまふ、と本人はよく嘆いているけれど、父に似たひどいクセ毛でそれをパーマと朝のコテでごまかすように巻いているわたしにはうらやましい話だった。

「ほんとは、一本早いのに乗りたいんだけどね。」

今日の1時間目は英語なので、教室を移動しなくてもいい。ホームルームが終わってみんな思い思いに席を立てて集まりおしゃべりをしている。そんな中から廊下で何人かの男の子にかこまれて笑っている総一郎に視線を向ける。

「ああ、“総ちゃん”、ね。」

わたしの視線をたどったのか、結香も総一郎の方を向いて笑う。これも？という風にゆるんで崩れた髪のを長い指でつまむ。手の大ききさって身長に比例するんだろうか？すらっと身長の高い結香は大人っぽい手をしているのでうらやましい。わたしと言えば、手のひらを広げて見せれば子供の手みたいだと笑われたことは少なくない。

「家を出たときはいい感じにふんわりしてたんだけどね。」

総一郎から視線をはずしてため息を吐くと、結香はくすくすと笑った。今まで同級生の中でも「しっかりしている」と言われていたけれど、結香はそんなわたしをこっそりと甘やかしてくれる。初めて味わう感覚にちよつとくすぐったいような恥ずかしいような気持ちだけれど、なんだかうれしい。

ちよつとお手洗いに行つて来る、と結香は教室を出ていく。一緒に行こうなんて絶対言わないところがさばさばしていて好きだ。

次の授業の英語は、確か予習しないといけない範囲があつた気がする。一応はまとめてあるけれど、この席は授業中に当てられる頻度がすごく高いので、きっちりやつておかなければいけない。もう一度目を通しておこう、と思つて机の脇にかけたかばんに手を伸ばすと、わたしの机の近く立っているに大きな足が目に入った。

かかとを踏んで上履きをはいている総一郎の足とは違って、大きいけれどサイズのきつちりとあつたキレイな上履きをはいているその足。顔をあげなくてもその持ち主が分かつた。

「どうしたの？」

「山崎、今日委員会の集まりがあるんだけど。」

顔をあげてすぐやつぱりな、と思つた。大足の男の子の名前は同じクラスの瀧川 優司だ。瀧川くんとわたしは一緒にクラス委員をやっている。入学式の後のホームルームで他薦によつてクラス委員に決定された、まあ簡単に言うなら押し付けられた瀧川くんを見て、人がいいんだなあとと思つた。大きな体のせいだけではなくて、口調や醸し出す雰囲気がかう、包み込んでくれるとかいうんだろつか、一緒にいると安心させてくれる。後から聞けば中学生の頃からこつこつたまとめ役をしてきたらしい。先生受けのいい滝川くんがよく

何かを頼まれているのを見ることがある。わたしは、高校の委員会なんて他人事だと思つてのんきに瀧川くんつて子、不憫だなあとか考えていたら、総一郎の「副委員長、陽菜がやれば？お前中学のときよくやつてただろ。」つていう大きなコソコソ話が先生はもとよりクラス中の耳に入つてしまい、今に至る。

今まで、総一郎の世話をしてきたわたしにとつて、こんなに落ち着いた同い年の男の子は出会つたことがなかったので、瀧川くんとの出会いは新鮮だ。

「あ、委員会つて今日だっけ？瀧川くん部活あるよね、大丈夫？」

たしか瀧川くんは水泳部で、最近かなり早めのプール開きをしたと言つていた。委員会とはいえ1年生が遅れていくのはよくないだろう。

「顧問には一応伝えといたから大丈夫なんだけど、最初の準備だけ手伝つときたいんだ。それで山崎には悪いんだけど……。」

「じゃあわたし先に言つて、話聞いとくよ。」

ごめんな、とプールの塩素のせいか生まれつきなのか色素の薄い短い髪を申し訳なさそうにかく瀧川くんを見て、苦労性なんだろうなああとこつそり思つた。総一郎のぱっちりとした目とは違い、すっと切れ長の目が優しく微笑む。自分の上に兄弟のいないわたしは、お兄ちゃんつてこんな感じなんだろうかと想像をめぐらせる。

「瀧、今日の昼って学食？」

聞きなれた声が瀧川くんを呼ぶ。面倒見がよくてとっても優しい瀧川くんことは、総一郎はとっても気に入っている。前に、ああいう優しい人にわがまま言われたい。ってわたしがこっそり言ってみたら、瀧川くんがわたしのアブナイ性癖（って総一郎は言っていた）の餌食になるのを阻止しなければならぬ！と息巻いていた。総一郎曰く、わたしの優しさは人をだめにする優しさなんだそうだ。俺がその証明だ、と胸をはっていたのであながち間違いではないのかもしれない。

「ああ、今日弁当ないから学食。総もか？」

わたしの机の前で瀧川くんが総一郎を振り返る。窓際で友人と話していたはずの総一郎がすぐ近くまで歩いてきていた。

「うん、学食行く。次の休み時間食券買いに行こーぜ。」

うちの学校の学食は食券制だけど、毎時間の昼休みにも食券を発売しているので人気メニューや数に限りがあるメニューは早めに行かないと食べられない。

「総ちゃん、お弁当は？」

わたしはふと思い出して首をかしげる。さっきおばさんのお弁当を総一郎に手渡したはずだ。

「朝飯に変わりにさっき食べた。」

ブレザーの上からおなかをさすりながら総一郎は言う。こんなほっそい体にどうやってたらそんなスピードで食べ物が入っていくんだろう。

「そっか、朝食べてないもんね。」

生涯、成長期だ！とうらやましいことを豪語している総一郎は特に高校生になってからよく食べるようになった。それがそのまま縦に伸びるんだろうからうらやましい。

「総ちゃん、早起きして朝飯食えよ。」

瀧川くんがからかうように総一郎の肩に手をおいて言う。わたしのマネをしたんだろう“総ちゃん”という呼び方が気に入らなかったのか、さほど手入れなんてしてないはずなのにキレイな眉が器用に左だけつりあがる。

「その総ちゃんってのやめろ、…陽菜も。」

瀧川くんに言い返していた総一郎の不機嫌の矛先をむけられてわたしは一瞬答えに窮した。総ちゃんと呼ぶなんて言われたのは初めてだ。総ちゃんとか呼んだことがないのに、なんて呼べばうんだろう？加藤くん？わがまま王子？子供がかまってくれなくなつた親ってこんな気持ちなんだろう？

「みんなで集まって何話してるの？」

しょんぼりとしたわたしの心を読んだように帰ってきてくれたのは結香だ。

「総ちゃんが、総サマって呼べっていうの。」

全部きこえてたんだろう結香は、そんなわたしの冗談をきいて目を細めた。総一郎に遠ざけられたような気がして落ち込んでいた気持ちがちよっとまぎれて楽になる。

瀧川くんも笑いをこらえるように口元に手をあてていて、総一郎は本当に呼べよ、と笑う。総サマ、と呼べっというならわたしは全然呼ぶけれど、きつと恥ずかしい思いをするのは総一郎だ。

授業開始を知らせるチャイムが鳴る。結局英語の見直しができなかったので当たりませんように！と願ってみたけど、端から順番に回答を、という理由で一番最初にあてられた。結局その授業中には教室の1番端の総一郎のところまで問題がまわっていなかった。今度また続きから、と先生は言っていたが、どこまで回ったかなんてきつと忘れてまたわたしを当てるんだろう。

敬称はサマで（後書き）

席替えて3か月連続で一番前の席になったことがあります。

世界を敵にまわしても

今日のお昼はなにを食べよう。

早起きの苦手な母親がお弁当を用意してくれるわけもなく、同じく早起きが苦手なわたしがお弁当を作るわけなくて今日もわたしは学食だ。うちの学校の学食はパートのおばさんが作ってくれているんだが、なかなかおいしい。家庭の味に飢えている独身の先生たちもよく利用している。

今日の日替わりはたしかソースカツ丼だったから、昼休みじゃあもう食券は残っていないだろう。スタンダードなメニューの中から選ばなければいけない。

食堂まで続く廊下を結香と歩きながらわたしは財布片手に頭の中に学食のメニュー表を思い浮かべてみた。

「今日も真剣に悩んでるのね。」

わたしが今日食べるものを悩んでいるのが分かったんだろう、結香が歩きながら言う。

「結香は何食べるかもう決まったの？」

食堂に近づくにつれて今日の日替わりメニューのソースカツ丼のソースの香りがただよってくる。食べられないとわかっていると、食べなくなるのが人間の性だ。

「今日はカレーにしようかな。」

うーん、と少しうなづいてから結香が答える。食堂のカレーはけっこ

う辛くて、初めて食べた日に残してしまっただけは食べていない。カレーおいしいけど、辛くて食べられなくてすいませんってあやまったら食堂のおばさんがだんだん味を辛口から甘口に移行してあげるからね！と言ってくれたので楽しみにしている。

「カレーかあ、わたし何にしようかな。」

結香の意見をきいても結局決まらなくてわたしはタメ息を吐く。こうなったら食券を買う直前まで悩み続けて寸前に決めるプレッシャー決めをやるう。

よし、と決心したところで食券の列の最後尾に並んだ。お昼の前の授業が早めに終わったおかげで、けっこう早く食堂に着くことができた。見慣れた食堂のメニュー表を見て思わずわたしの口からううと小さく声が漏れてしまう。

「きのうは何食べてたっけ？」

「きつねうどん…のきつね抜き。」

結香の問いにメニュー表を眺めながら答える。ああ、そうだった、素うどんになったんだよねと結香が笑う。きのう食べようと思ったきつねうどんは、好きだから最後に食べようと思って残っていたあげを奪われてただの素うどんになってしまった。

「お、陽菜はっけん。」

きのうのきつねを奪っていった人がわたしのうしろから声をかける。振り返ると、総一郎と瀧川くんが立っていた。もちろんあげを食べたのは総一郎の方だ。

「瀧川くんは総ちゃん、今日何にしたの？」

参考までに教えてください、と先の休み時間に食券を買っているんだろ？2人の手元を覗き込む。これ、と見せられた2枚の食券には両方「ソースカツドンブリ」と記されていた。もちろん売り切れのそのメニューじゃ全然あてにならない。いいなあ、ソースカツ丼。

「陽菜なににするか決めてないのか？」

わたしの盛大なタメ息をきいてか、総一郎がわくわくした様子で言う。総一郎が良くないことを思いついたときの悪い笑顔を浮かべている。

「じゃあさ、カレーにして。俺今日カレーも食べたかったんだ。」

な？とにつこり笑った総一郎だけど、わたしが学食のカレーが辛くて食べられないことをわかっていて言うんだからたちが悪い。でも総一郎が言うんだからしょうがない、わたしがはいはい、と返事をしようとしたとき結香が口をはさんだ。

「私、カレーにするつもりだったからちょっと分けてあげる。陽菜は辛いのが苦手だから可哀想。」

少し怒ったように言う結香に、またこそばゆい気持ちかわきあがる。わたしは少しうれしくなってしまうて、結香の腕に自分の腕をまわしてへへ、と笑った。

「川島は陽菜に甘すぎ！」

こいつの甘党を直さない！と怒っている総一郎は瀧川くんになだめられながら丼ものの受け取り口の方に歩いていった。結香は満足げにそれを眺めている。

「今日はエビフライ定食にする！」

結香の腕に巻きついたまま、わたしは宣言する。いいね〜とほほ笑む結香は、わたしを褒めるように頭をなでてくれた。結香はわたしが総一郎のわがままをきいていることをヨシとしない。自分を犠牲にしてまで相手に尽くすことが悪いことだとは言わないけれど、その相手が問題なんだそうだ。

一緒に食券を受け取ると、それぞれの商品に引き換えてもらう。うちの母親はあげものの後片付けが嫌いなので、なかなか家では揚げたてのあげものを食べる機会がない。食堂は貴重なチャンスだ。

大ぶりではないけれどカリッと上がっていることが見てとれるエビフライと、ミニサラダ、オニオンスープ、ご飯が乗ったお盆を持って一足先に席に着いていた総一郎や結香の元に向かう。みんなそれぞれの食事の前で学校生活1番の楽しみとも言える時間を待っていた。

「お待たせしました。」

結香の隣に座ると、すでに箸を持っていた総一郎がいただきますと言うか言わないかくらいの間でソースカツ丼を食べ始めた。ご飯をおいしそうに食べる総一郎は本当に愛らしい。夢中で食べているこのときだけは無害だ。ほかのみんなもそれにつられたように軽く合掌してから箸をすすめる。わたしもミニサラダのプチトマトに箸を伸ばした。

「はー、うまかった。」

ソースカツ丼を食べきった総一郎が丼ぶりを置いてお茶を飲む。総一郎の隣を見ると瀧川くんも食べきるところだった。結香のカレーも残り少なかったのでまだエビフライを2匹の内1匹残しているわたしは少し焦り始める。

「陽菜、もうお腹いっぱいだろ？」

突然目の前に伸びてきた手はわたしのメインディッシュからエビフライを引き抜く。あ、と思ったときにはそれはもう半分総一郎の口の中に入っていた。

「わたしのエビフライ！」

そうつぶやいたときには、総一郎の口から出ている部分はしつぽのところだけだった。結香が口を開いたままかたまり、瀧川くんもめずらしく目を見開いて驚いている。総一郎はにこにここと笑って、しつぽの部分をわたしの皿に戻した。

「陽菜からもらうエビフライはうまいな！」

きのうのあげのときも同じようなことを言っていたなあと思いだす総一郎が多少なりともよろこんでいるならいいか、と納得してわたしも残りのご飯を食べきる。

「ちょっと、何も言わずに食べるのやめなさいよ！」

「総、エビフライはだめだろ。」

結香と瀧川くんが総一郎を責めるのを笑いながら止める。“わたしからもらう”エビフライがおいしいと総一郎が言ってくれるなら、全部あげたって全然平気だ。きつと結香に言ったらちよつと怒られてしまふんだろうけど。

やっと2人を納得させられて、ほつとしながら総一郎に視線を向けると、2人に責められたからか拗ねたように唇をとがらせている。その視線がこちらを向くと黒目がちな瞳がわたしを見つめる。総一郎の目は何かを確かめようとするように、じつとこっちを見ていた。さっきまでの傲慢な態度から一転して、まるで親から引き離された子犬のような目をしている。

言わないといけない、伝えてあげないといけない。

「総ちゃん、大丈夫だよ。」

わたしは総一郎に精一杯の笑顔を向けた。

心配してくてもわたしはいつも総ちゃんの味方でいるのに。どうやったらそれをわかってもらえるんだろう。

そんな哀しい顔をさせるくらいなら、わがままを言われていた方がずっといい。

世界を敵にまわしても（後書き）

総ちゃん、全力でやなやつ。

ひとりぼっちにならないように

お昼御飯がおわったら睡魔と闘う午後がやってくる。

それをなんとか乗り切ったけど、今日は放課後に委員会がある。バイトも何もしていないわたしはいいけれど、毎日部活に行ってる瀧川くんは大変だろうなあ。

じゃあ解散、という声と共にクラスメイトが続々と教室から出ていく。家に帰る子、部活に行く子、バイトに行く子、塾に行く子いろんな放課後の過ごし方がある。わたしも高校では何か部活に入ろうかと思つて、結香と一緒にいくつかの部活に見学に行つたけれど結局帰宅部に収まつた。

中学のときも今回も、総一郎がいやそうな顔をしたのでやめてしまった。とは言いたくないけれど、総一郎にかまう時間をけずつてまでやりたいと思うことを見つけられなかったとていうしょうもない理由だ。

「結香、わたし今日委員会だから先帰つといてくれる？」

よく一緒に帰っている結香に声をかける。ちんたらと帰る準備をしていたかばんを持ってわたしの席まで迎えに来てくれた結香にごめんね、と謝る。

「そつか、委員会か。わたし今日バイトないから教室で待つてようか？英語の課題でもやつとく。」

将来は学校の先生になりたいと言っている結香は、お受験をする小

学生のための学習塾で事務のバイトをしている。さすがに高校生が勉強を教えるというのは無理なのでないらしいが、子供のテストの丸つけや最近ではちょっとした問題作成もさせてもらっているらしい。

将来の夢がすっかりしていて、そのために具体的に行動できていてすごいなあと思う。

「ほんと？委員会1時間で終わる予定だけど、たぶん伸びるよ。」

委員会とは言っても高校生のあつまりだ。重要な決定には先生たちの判断をおおがなければならなものも多い。なかなかすべての案件がスムーズに決まるということはない。なのでいつも決まった時間より延長してしまう。

何時に来るかわからない相手を待つというのはなかなかつらいものだ。でも結香はにっこりと笑って待ってる、と言ってくれる。

「遅くなつてごめん。」

委員会の集まりがある大教室の一番後ろに座っていたわたしの隣にひっそりと腰を下ろしたのは瀧川くん。部活が終わって急いで来てくれたんだろう、いつも冷静で静かな瀧川くんにはめずらしく少

し息が上がって頬に赤みがさしている。わたし以外に聞こえないように耳元で吐かれた小声の謝罪がかわいくてなんだか笑ってしまった。

「おつかれさま。これ今日のプリント、もらっというたよ。」

同じように小声で返しながらか、席についた瀧川くんの膝に余分に1部もらっておいたプリントをのせる。ありがとう、と口をぱくぱくと動かす瀧川くんにならずき返す。委員会はまだはじまったばかりだ。

今日のメイン議題は6月にある体育祭の詳細だ。1年生の役員なので重大な役割は持たされないだろうと思っていたら、一年が競技のとりまとめをするようにと言われてしまってかなり困る。でも毎年の決まりだし、みんなやってきたことだから今年も大丈夫だと先輩たちに言われてこっそりとタメ息を吐いた。

体育祭では総一郎の活躍を見ていようと思ったのにそれもないそうにない。その希望は来年に持ち越しになりそうだった。

委員会が終わって、瀧川くんと一緒に教室を出る。さっき手渡した資料に書いてある

『各競技の当番』の欄に書いてあるうちのクラスの数字を見て瀧川くんもタメ息をはいていた。

「体育祭、結構大変そうだね。」

「当日は休めなさそうだな。」

瀧川くんの眉がへにやりと下がる。瀧川くんの笑顔はちょっと困ったような顔でかなり愛らしい。こんなしっかりした人に愛らしいなんて言葉はちぐはぐな感じがするけれど。

「がんばろうね。あ、部活は？」

「頼りにしてるよ。今から行ってくる。委員会遅れてごめんな。」

そのまま手を振って校舎の外にあるプールに走っていった瀧川くんを見送りながら教室に向かう。瀧川くんみたいな優しい人にわがまま言われたいつて前に総一郎に言ったのは単なる冗談とか悪ふざけじゃない。優しい瀧川くんがときおり見せる隙はなかなかいい。

そんなことを考えながらわたしも結香が待つ教室に向かう。

委員会があつた大教室から校舎の反対側の位置にある自分の教室にもう少しで着くというところで、放課後の教室にはめずらしく明るい笑い声が聞こえる。静かな廊下に響くその声は聞いたことのある声で。いや、わたしは確信を持って教室をのぞいた。

「結香、おまたせ。」

教室を覗き込むとわたしの目がとらえたのは英語の課題をしている結香ではなかった。結香の机に載っているのは課題じゃなくてうちの学校の制服を着たわたしが良く知る男の子、総一郎だった。くすくすと笑う結香が明るい顔でこちらを見る。

「おつかれさま。今ね、加藤ちゃんと陽菜の話してたの。」

結香の優しい笑顔はいつもと同じはずなのに、なんだか心の奥がざわつくのはなんでなんだろう？

「ええ、やだ。どんな話？」

わたしはひきつらないように必死に笑顔を作ってその言葉を口から紡ぎただけで精一杯だった。いやな予感がする。ただじつとわたしの胸の中に居座り続けるこの“予感”をどうしたらいいんだろう。この正体を知ってしまったら、きっともう戻れなくなってしまいうがする。

総ちゃん、どうしよう。

わたしが総一郎のめんどろをみていると、まわりも自分自身も、総一郎も思っているだろうけれど、本当のところは違うんだ。総一郎がわたしの心を支えてくれている、いつだって必要としてくれることで。

だから、今回も。

そう思ったのに、いつもだったらわたしのことを見て大きな目を細めて顔をくしゃりとさせて笑っているはずの総一郎の視線はこちらに向いていなかった。

「ほら、こいつあわててるだろ。俺は陽菜のいろんな失敗見てるかな。」

わたしのことを話しているはずなのに、どうして？

それで、と続く総一郎の話。それを聞いて笑顔のまま驚いく結香。

会話に入れないとかそういうことじゃない、ただわたしはいつも通りの笑顔でそこに立っていることしかできなかった。

机にかけたままだったかばんを持って結香と総一郎と一緒に駅まで向かい、反対方向の結香に手を振って総一郎と2人になってからもわたしはこの違和感を振り払うためにはどうしたらいいのかずっと考えていた。

「陽菜、元気ないな。」

口数の少ないわたしを心配してくれているのか、総一郎がすこしかがんで顔を覗き込む。

「委員会たいへんなのか？」

うん、とうなずくことしかできずにうつむき加減で電車を待っていると、再び総一郎が口を開いた。今日の総一郎はいつもに比べて口数が多い。

「今日、家で晩飯一緒に食べる？ピザかなんか取る。しゃあないからおごりだ。」

「いいね、行こうかな。」

総一郎の言葉に顔をあげてわたしは半分反射的に答えていた。わたしは総一郎の晩御飯の誘いは断らない。総一郎のおばさんがよくご飯に誘ってくれるが、総一郎自信が晩御飯に誘うときはその日の晩御飯が独りの日だ。

「おう。CMでやってたタバスコがかかってるやつ注文しよう。」

「えー、それって辛いんでしょう？」

わたしが視線を向けると、総一郎の唇がにこりと笑った後にいたずらっ子のように舌を出した。その無邪気な子供のような笑顔に安心する。

あんなに胸を覆っていた不安が熱が下がるようにひいていく。やっぱり総一郎はわたしの天使で、悪魔だ。10年目の仲だし、きつとわたしの心の乱れだって隠し通せるものじゃないんだろう。きずつきやすくてやさしい総一郎に心配をかけたくないから、もつとちゃんと笑顔でいよう。

どうやったら総ちゃんをしあわせにできるんだろう？ばか、とあきれられても、無理だと言われてもあきらめられない。ずつとずつと笑顔でいてほしいから。

バスタオルの用意もします

総一郎の家でデリバリーしてもらったピザと、台所を借りて私が作ったオニオンスープを食べ終え、総一郎はソファに座ってテレビを見ている。わたしはテーブルの上の食器やピザのゴミを片付けてテーブルを申し訳程度にふきんで拭う。

テーブルをふいたふきんをシンクでかるくゆすいだから、漂白剤にスポンジと一緒につける。この除菌をしないとどうしても汚れているような気になってしまう。自分の部屋なんかはなかなか片付けられないのに、変なところで几帳面なA型だと自分でも思う。

「コーヒー飲む？」

手をハンドソープで洗い、総一郎に声をかけるとテレビを見たままの頭がこくりと揺れた。その返事を見届けてから、自分の家にはない某コーヒーメーカーのカプセル式のバリスタマシンのスイッチをいれる。マシンが初期起動している間に冷蔵庫から牛乳を取り出して隣に置いてあるミルクフォーマーの容器に半分ほどそそぎ、そこらもスイッチを入れる。ミルクフォーマーが止まったので、棚から出した大き目のカップに泡立った牛乳をゆつくりとそそぐ。総一郎はミルクがない方がいいと言うけれど、カルシウムのためにもいっつもいれている。こだわりの強いおさんの趣味が反映されているのか、色とりどりのコーヒーカプセルが縦長のケースにそれぞれ整列されている仲中から、総一郎がいつも飲んでいる緑色のカプセルを取り出してバリスタマシンにセットする。

真っ白だったカップの中に一筋の柱がうたれるようにコーヒーがそ

そがれる。表面上はほとんど白いままだけれど、中身の半分は黒くなっているはずのそれをテレビを見ている総一郎のところまで運ぶ。

「はい、どうぞ。」

「……ありがとう。」

カップにふんわりと盛り上がった牛乳を見たからだろう、総一郎は一瞬眉をひそめたけれど素直にそれを受け取って口元にはこぶ。

「あー、おいしい。牛乳入ってるど！」

唇についたミルクの泡をぺろりと舐めながらこっちを向いて笑う。その笑顔にほほ笑みかえしてわたしはキッチンに戻り、漂白剤についておいたふきんとスポンジに水道を向けて蛇口をねる。念入りに洗い流してからふきんをぎゅっと水切りしてシンクについてあるホルダーにしまい、ふきんもしぼってタオルハンガーに干す。シンクをかるく流してからふう、と息をつく。

「総ちゃん、わたしそろそろ帰るね。」

時計を見るとちょうど8時をすぎたところだった。いつもはこの後一緒にテレビを見たりして、もっと遅くまで居座るけれど、最近頻繁に総一郎の家にいるのでうちの母親があまりいい顔をしない。

「え？なんで、まだいいじゃん。」

ソファに半分寝転がるような体制だった総一郎がぐるり、と体を反転させて起き上がる。唇をゆがめてぶすつとした表情もかわいらしくてわたしは思わず笑ってしまう。

「最近帰りが遅いつて、うちのマミーが。」

「おばさんか……今日泊ると思つてたのに。」

総一郎の家にはよく泊るので、わたしのパジャマや制服のシャツ、そして下着まで一式置いてある。もちろん総一郎はそれがとくに収納されているかは知らないけれど。

もう高校生なんだから、と口うるさく言うのはお母さんだ。仕事と人づきあいが好きで家のことをあまりしない、家族にはそこそこ無関心な人だけれど、近頃の頻繁な外泊にはめずらしく母親として口をはさんできた。

総一郎が泊るように言うのは、おばさんが出かけて帰ってこない日が多い。総一郎のお父さんはあまり家に帰ってこない。4つ上のお姉さんは去年から遠くの大学に入学したので、一人暮らしをしている。最近、というか総一郎が高校生になったところからおばさんは家を空けることが多くなった。「陽菜ちゃんがいってくれたら安心よ。」とやさしく笑いながら近所の買い物では絶対に着ない、キレイなお洋服といいにおいのお化粧をして出かけていくおばさんを総一郎と一緒に見送り、おばさんにもらったお金で総一郎と晩御飯を食べる。

母親に似たのか、家があまり好きじゃないわたしは自宅に独りでも全然気にならないけど、ちいさな頃からおばさんやお姉さんに愛されて育った総一郎はきつと独りの家が好きじゃないんだろう。

「泊りはさすがに怒られそうだからやめとく。」

いつも泊る、と電話で連絡したら無言で通話を切る母親の表情を想

像しながらわたしは首を振る。いくらあまり好きじゃない家庭でも、やっぱりわたしの家だから。いざ帰ったときに空気扱いされるとけっこうつらいものがある。

わたしの答えが不服だったのか、唇だけでなく眉までよせてこつちを見ていた総一郎がぷい、とテレビの方に向き直る。

「お風呂入ってきなよ、出てくるまで待つてるから。」

総一郎はまちまちと2、3度まばたきして考えてから、うんとうなずいて風呂場に脚を向けた。

せめて総一郎があとは寝るだけ！の体制になるまでは一緒にいようと思う。

総一郎が飲んでいたコーヒーのカップをキッチンに運び、かるくすすいでからさつき漂白したスポンジに洗剤をつけて軽く洗う。それを食器置きのかごに伏せてから、わたしは階段に向かって歩く。総一郎の部屋に行って、パジャマや下着を用意するためだ。もちろん総一郎の。

引き出しを開けて一番手前に入っていた下着と、寝巻を取って部屋を出る。さすがに靴下のようにまじまじとコーディネートする度胸はない。階段を下りてそのままリビングに戻らずにバスルームに向かう。脱衣所の扉をかるくノックして中にいる総一郎に声をかける。

「開けていいー？」

「おー？」

浴室にいるからだろうこもっているけど不思議そうな総一郎の声が返ってくる。自分がパジャマを持たずにお風呂に入ったことをわかっていないみたいだ。この前パジャマを忘れたときは腰にバスタオルを巻いただけの状態で出てきたのでびっくりした。

脱衣所に行く扉をあけると、半透明のドアの向こうに総一郎の影が見える。

「パジャマここにおいとくね。」

洗面台のスペースに寝巻と下着を置くと、また浴室から水音と一緒に声が返ってくる。

「ああ！忘れてた。ついでにバスタオルも出しといて。」

「はいはい。」

背伸びをして壁の上の方に取り付け付けてある棚からバスタオルを引っ張り出す。加藤家はみんな身長が平均以上だからこんな棚の位置が高いんだろうか。

取り出したバスタオルからふわりと香るのは柔軟剤のにおいだ。総一郎の制服からいつも香っているのとおんなじで、心地いい。なんていう柔軟剤か今度おばさんに聞こうと思う。

そんなことを考えながら総一郎のお風呂上がりセットを準備してわたしは脱衣所を出た。キッチンに戻るとすぐに冷蔵庫を開き、ミネラルウォーターの入ったペットボトルを取り出す。食器棚からグラ

スをひとつ取り出してそこにお水を注ぐ。それを一気に半分くらい飲んで息を吐いた。一息ついてからまたグラスを傾けて喉をうるおしていると、お風呂場の扉が開く音がした。わたしと比べたら半分か4分の1以下だろう総一郎の短い入浴時間が終わったみたいだった。今飲みほしたグラスにもう一度よく冷えたミネラルウォーターを注ぎながら、総一郎の髪の毛を乾かすためのヘアドライヤーが、総一郎の部屋に置きっぱなしなことに気付いた。

総一郎の部屋で髪の毛を乾かしてあげようか、と一瞬考えたけれど、総一郎と一緒に部屋に行けば帰り辛くなるだろうと思って小さく首を振る。

総一郎はいつも髪の毛を乾かさないので心配だけど、ちゃんと自分で乾かすように念を押して帰ろう。

リビングに座らせて髪の毛の水分をあらかたタオルで拭ってから帰ってもいいだろう。こんなに悩むくらいなら泊れば良かった、と思うけれど。

本当は母親に文句を言われたせいで泊らないんじゃない。

放課後に見た結香と楽しそうに話す総一郎を思い出すと泣きたくないような気分になるから、きつとこの見苦しい感情は嫉妬なんだろう。

泊らない、って言ったときに総ちゃんが不機嫌になってくれてうれしかった。こんなに好きなのに、幸せにしたいのに、総ちゃんにさみしい思いをさせることで安心している。

バスタオルの用意もします（後書き）

前話から時間あいてしまいました！

ノートも見せませす

ぜんぜんわからない、ひとつも。

教室の一番前の席で回答欄が真っ白な紙を広げているからだろう、小テストという名目上話しかけられない先生がわたしの前で何度目かのため息をついた。担当の先生のこだわりで毎時間前回の授業のおさらい小テストを最初に実施しているけど、全部で10点満点のそのテストで私は40点以上とったことがなかった。

この小テストは放課後に再テストがある、残酷なものでこのテストの合格ラインは60点だ。

毎回テスト問題を考える先生も大変だし、指導意欲のあるいい先生だ、なんて問題が解けないあまりに現実から目をそらしていたけど、下を向けば理解できないままの数字や記号が視界に入ってくる。

中学のころから苦手だな、と思っていた数学が高校に入ってからのことさらにできなくなっていた。このままじゃもうすぐ迫っている初めての中間テストでは、どんな点をとってしまうか不安だ。

「じゃあ、回答やめてとなりの席の人と交換して。」

なんとか記憶の片隅にあるそれらしい数式に数字をあてはめてややこしい計算を終えて答えを出し、となりに座るクラスメイトにテスト用紙を手渡す。

先生が1人ずつ採点していたんでは、放課後までにすべてのクラスの採点が終わらないし、すぐ答え合わせをすることで自分がなぜ間違ったかわかるからという理由でこうして毎回となりの席の子と交換して丸つけをするけど、今月に入って1週間に4日ある数学の授業のたびにわたしのテストにバツをつけるという仕事をこなしてくれている少年は、わたしの苦笑いを受け止めて同情したように口の端をあげた。

読み上げられる答えに合わせて交換でやってきた彼の解答に丸をつけていく。どうして同じ年に生まれて同じ学校に通い、同じ授業を受けているはずなのにどうしてこんなに解答には差があるんだろうか？彼のテストは10問中9問正解、つまり100点満点中90点だ。わたしにはわかりようもないことだけど、間違えた1問もきつと計算ミスか何かなんだろう。

「はい、今日もすごいね。」

わたしは努めて明るく少年にテスト用紙を返却する。

「ありがとう。山崎さんも…その、おつかれさま。」

きつと気をつかってくれているんだろうクラスメイトの優しさに感謝しながら手の中に帰ってきた紙を見つめる。さっき私が書いた大きな赤丸とは違って申し訳なさそうに問題番号につけられたバツ印が目に入って、さっきまで手元にあった解答が自分のものだったらどんなに幸せだろうかと想像しながら目を閉じた。

「放課後の再テストは視聴覚室でやるから、60点以下の人は出てください。」

授業中に雑談になるとよく「もう後数年で定年退職だ」とおだやかに笑う、慈愛深いと評判の先生の言葉がどうしてこんなに胸につきささるんだろうか。わたしが署名した横にある赤色の数字は篠山くんが遠慮して小さく書いてくれたんだろうけど、はつきりと2の文字とゼロの文字が並んでいた。あー、50点だったおしい！とか計算みすつて間違えた！とか後ろから聞こえる同級生の声を聞きながら、おしくもなんともないわたしに隙はない！と再び現実から目をそらした。

「ほんとうに苦手なんだね。」

「え？」

一番うしろの席の生徒がテストを回収してくれて、先生に手渡すとそれを先生が数えている間はみんなの息抜きタイムだ。隣の数学天才少年・篠山くんがこちらを向いて声をかけてきた。

「あ、うん。苦手っていうか…ぜんぜんわからなくて。」

篠山くんには毎回点数を知られてしまっているのではは、と乾いた笑いを返すしかない。隣の席になってまだ1カ月とたたないけれど彼はなかなか優しいので別にからかうような目的で言ってるんじゃないとわかってしまうからなおさら笑うしかない。けどわたしとしては同情するならお前の頭分けてください、というレベルなのでひがんでしまう気持ちがむくむくと沸いてきた。

わたしだって、授業中に眠たくなることはあるけどそれはみんなあることだし、ノートも黒板に書かれてあることだけじゃなく先生が

口頭で説明しただけのものもメモしている。なのにどうしてこんなに数学が解けないんだろう？

「良かったら、教えようか？」

「えっ？」

「数学、俺けっこう得意だから。」

篠山くん、いい人なのに嫉妬してごめんなさい。

さっきまでの心の中での悪態に謝罪しながら私がうなずくと、篠山くんはすこしほっとしたように口元を緩める。

「で、そのかわりに……」

「じゃあ、授業を開始します。」

そのかわりに？篠山くんが何かを言いかけるとテスト用紙が人数分あったらしく先生の声が通常授業の開始を告げる。せめてテストの点が悪いんだから心象だけは良くしておかないと思ってしているわたしはすぐに前を向いて教科書を開いた。

数学があればだけできる人に教えてもらったら、わたしでもちよつとは数学と仲良くできるかもしれない。

わたしにとって長かった授業時間が終わり、先生が教室から出ていくと隣の篠山くんが椅子をひいてこちらを向くのが分かった。

「山崎さん、さっきの話なんだけど。」

「あ、本当に教えてくれるの？知ってると思うけどわたし数学ぜんぜんだめで、大変だと思うよ。」

さっきは教えてくれるという言葉に浮かれていたけれど、よくよく考えたらわたしみたいな劣等生に数学を教えるのはなかなかの困難だ。席が隣になったというだけの彼にそんな難題を押し付けていいんだろうか。

「いいよ、全然。そのかわり、俺に古文教えてくれない？」

「古文？」

予想外だったけど、なんとなく理解した。もともと国語が得意なんだけれどこの前の古文の小テストでわたしは運よく満点を取った。そのときも交換採点だったから、篠山くんはその点を見てこの申し出を言ってくれたんだろう。でも篠山くんのそのときの小テストもそんなに悪くなかったように記憶している。きつとそんなにできないわけではないんだろうけど、ちよつと苦手という感じなんだろうか。全然そんなそぶりもなかったから気付かなかったけれど。

「山崎さん古文すごくできてたから。俺、どうしても苦手で。お願いできない？今日の再テスト後とか。」

神様はなんて上手に席を配置したんだろうか、数学ができなくて国語がちよつとできるわたしと数学がすごくできて国語が苦手な篠山

くんを隣にするなんて。いやむしろ篠山くんが神様なんだろうか。

うれしくて、うなずこうと首を振った瞬間、上から声が振ってきた。

「陽菜、また再テスト？」

「総ちゃん。」

自分の席に座ったまま後ろを振り返って顔をあげると、総一郎が眉間にしわをつくってこちらを眺めていた。

「うん…でも再テスト受けるの今日で終わりかもよ、篠山くんに教えてもらうから。」

どうだ、と胸を張って言えることじゃないけど胸を張って言ってみると総一郎はより不機嫌そうに相変わらずかわいらしい顔をゆがめてこちらを見おろした。きつと篠山くんのことを不憫に思っているんだろう。

「そのかわりに、わたし古文を教えるの。ギブアンドテイク！」

言いわけを付け加えるように、篠山くんへの罪滅ぼしを宣言する。

「お前、古文感覚で解いてるじゃん、教えるとか無理だろ。やめとけよ。」

総一郎はわたしにそう言いながらなぜかこちらに背中を向けて篠山くんの机の間に立った。たしかにわたしは国語が得意だって言っても、現代文でも古文でもなんでもカンに頼っているところがあるの

で、人になんでこの答えになるの？って聞かれてもなんとなく、としか答えられない。

「そっか、たしかに無理かも。篠山くんせつかなのにごめんね。」

確かに、と納得してしまったので、総一郎の影から顔を出して彼に謝る。せつかく数学が人並みにできるようになるチャンスだったのになあ、後はもう家庭教師とか学習塾に通うしかないんだろうか。

「え、あー…うん。」

総一郎ごしに篠山くんの返事が聞こえる。さすがの篠山くんでも呆れかえってしまっただろうか。数学が壊滅的にだめで、国語はカンだなんて。

「今度俺が教えてやるから、大丈夫だ。」

机の上に出しっぱなしだった数学の教科書をめくって数式が頭に入ってこないかと眺めていたら、いつの間にかこつちを振り返った総一郎が笑顔で言う。

総ちゃんが優しいなんて、なんだか不気味だと思ったけれど。どうせこの言葉も今日のお昼には忘れて、数学教えて！なんて言った日にはなんで俺が陽菜に、とか言われてしまうつわかっていても、とつてもうれいのでうん、うん、と何度もうなずきながらうつむいたまま教科書を読んでいるふりをしてにやける頬をごまかした。

「あ、そうだ英語の予習やってる？見せて。」

「それ言いに来たの？英語次だよ、早くうつして！」

思い出したように総一郎がはっとして手を出した。よく見ればもう片方には総一郎の英語のノートが握られている。きつと写しに来てわたしと篠山くんの会話をきいて口をはさんだんだろう。

たとえ一瞬でも、総ちゃんがわたしのためにつてひとかけらでも言葉してくれるんなら、それはずっとずっとわたしの宝物になる。

ノートも見せます（後書き）

久しぶりの更新になってしまいました。
あれ、総一郎ってこんな感じだった？

という感じになってしまいました。

それと、この小説に評価をいただきました！

10点満点の点数だと思って

こんなにもらえた、ひゃっほー！と喜んでたんですが、
5点満点中だと知ってこんな高得点をもらって恐縮です。

お気に入り登録してくださってる方、読んでくださった方
みなさんありがとうございます。

全然お話に進展がなくて申し訳なく思います。

また近いうちに更新したいです！
よろしく願います。

チーズタルトを買います

ほぼ全クラス合同の再テストなはずなのに、1クラス分も人数のいない生徒たちをが受けた放課後の再テストで40点という点数を獲得すると、先生は白髪混じりの自分の髪の毛をなでながらつらそうに目を細めて「よくがんばった、よな？」と聞いてきたので、次はもつとがんばりますから…と先生から目をそらしながら返事をして再テスト会場を出た。どうにかして数学ができるようにならないものかと奇跡を願いながら放課後のさみしい廊下を歩いた。

サイレントマナーにしているカバンの中の携帯を確認すると、新着メールを知らせるライトが断続的に点滅する。開いてみると『教室にいる』という一文だけのメールが見えた。結香もメールは長文ではないけれど、絵文字のひとつくらいはいれてくれる。こんな端的なメールを送ってくるのは母親か、総一郎だけだ。

総一郎が教室で待っていると思うと、再テストで沈んでいた気分も少しは浮上したような気がする。今日は結香がアルバイトなので、わたしの再テストにつき合わせるのはいからと先に帰ってもらったので、このまま沈んだ気分のまま帰るのはいやだと思っていたところだった。

「総ちゃん、おまたせ。」

教室をのぞくまでもなく、総一郎は廊下側の一番後ろの席で分厚い週刊の漫画雑誌を読んでいた。今朝は持っていなかったから、授業が終わってから今までの間に近くのコンビニに行って購入したか誰かに借りたんだろう。

「おつそい。2周目読み終わるところだった。」

顔をあげて広げていた電話帳くらいの厚さと大きさのそれをばふ、という音とともに閉じる。総一郎は好きな漫画しか読まないから、あれだけ分厚い雑誌なのにけっこうすぐに読み終わってしまうんだ。その1冊で300円ほどするんだから、全部読まなきゃもったいないとわたしはいつも思う。

「ごめんね、テスト終わってから先生に引き留められちゃって。」

「こうじいは陽菜がお気に入りだからな。」

“こうじい”はうちのクラスの数学担当のあだ名だ。生徒の間でこそそそと呼ばれるものじゃなくて、みんな先生に親しみをこめて呼びかけている。成績不振のわたしはおとなしく「せんせい」と尊敬をこめて呼んでいるけれど。こうじいのあだ名は先生が定年間近という歳だからではなく、本名の『康二』から来ているので学生のころからそう呼ばれていたらしい。学生のころから年齢以上に落ち着いていたから、「じい」の称号がついたんだろうとわたしは秘かに推察していた。

「逆お気に入りだよ。お気に入りなのは篠山くんとかでしょ。」

こうじいにとつてわたしは手のかかる生徒ではあるだろうけど、やっぱり教えがいのある優等生の方がいいだろうと思う。ふう、と息を吐いて数学とこうじいのことを忘れようとしていると、同じタイミングで総一郎がはあ、と息をついたのが分かった。

「そつえば、数学教えるとかって篠山が言いだしたのか？」

「うん、優しいよね。でもわたし数学できなすぎて迷惑になるし、総ちゃんが止めてくれてよかったかも。」

あともう一步でそんな親切な人につらい思いをさせるところだった。数学を教えてもらえなかったのはちよつと残念だけれど総一郎のわたしへの（的を得すぎている）暴言もときには誰かを救うらしい。

もう一度はあ、と大きいため息をはいて総一郎が立ち上がる。毎朝自分でセットしているこだわりのレイヤーカットをかき乱すように片手で頭をかきながら机の横にかけてあったカバンを手に取る。これは総一郎がいらしているときによくするクセだった。世界が自分中心に回つてると疑わないどころか、当たり前すぎて自覚もしていないようなこの人が何に心を乱されているのか、わたしには分からなかった。

「数学の教科書もてよ、明日も小テストあるからその範囲だけ教えてやる。」

「ほんと？ いいの？」

空のお弁当箱しか入っていないぺたんこのカバンにけっこう幅をとる漫画雑誌をなんとなく詰め込みながら何も無い風に総一郎はつぶやく。

他人（篠山くん）が迷惑するのでさえ、あんなに不憫そうな顔をしていたのに、その不幸を総一郎がかぶろうとしていることが信じられない。けれど今はこの気まぐれなわたしにとっての幸福に甘えてしまおうと思う。

「チーズタルトおこれよ。」

「カフェオレもつけちゃう！」

総一郎が言うチーズタルトは、駅前にあるコーヒーチェーン店のちよつと割高なやつだけれど気にしない。何かのお礼と言つても総ちゃんはめつたにわたしにおごらせてくれない、たとえ親からもらったお小遣いで買ったものでもわたしがあげたもので喜んでいるところを見たい。

「篠山がタダで教えてやるって言つても……。」

ちよつとでも自分の実力に抗うために家で予習しようと思い、数学の教科書とノートはカバンに入れていたので机の奥にしまいこんであるはずの数学の問題集だけを取りに総一郎の席から一番はなれた自分の席に向かう。

総一郎が後から何か言つたけれど、めずらしく小声なのとわたしがうれしくてはしゃいでいるのではつきりと聞き取れない。

「タダがなに？」

「いや、タダでコーヒータイム味わえてうれしいなって。」

机から問題集をひっぱり出して総一郎を振り返ると、廊下の方に顔を向けてツンとすましていた。

少しまた機嫌をくずしたように見える総一郎の顔を、窓側から差す夕日が照らす。

せつかくの情緒あふれるシチュエーションなんだから、総一郎があの悪魔的にかわいい笑顔を向けてくれないだろうかとわたしは瞬時

にこっそり期待する。

「総ちゃん、ありがと。」

「なんだよ急に。」

笑顔ではなかったけれど、総一郎の顔がこちらを向いて視線が合う。

総一郎のものととは違ってかさ高なペンケースやノートたちが溢れかえるカバンに問題集を詰め込みながら、やっとこっちを向いた総一郎の元に戻る。

唇はまだ少し不満そうにつきでていたけれど、わたしが馬鹿みたいに笑っているのにつられたんだろっ、総一郎のその唇の端がちょっとだけふにやりと上がった。

いつも笑顔でいてほしいと願っている。なんて言えば聞こえはいいんだけど本当はそれだけじゃない、わたしが総ちゃんを笑顔にしたい。総ちゃんを笑顔に、幸せにできるのはわたしなんだって、そんな自己満足がわたしの自尊心を満たしている。

これを言ったら、きっとほかの人は眉をひそめるだろうけれど、きっと総ちゃんは片方の眉だけをあげて笑ってくれるだろう。

「じゃ、チーズタルトとカフェオレ飲みながら教えてください。」

一足先に教室から出る。

明日こそ初の60点以上を獲得して、先生のことをこうじいと呼ぼう。破滅的なわたしの数学脳だけれど、どれだけひどくても所詮は

わたしの脳みその一部なんだから長年刷り込まれた「総一郎 イコール 幸福」の絶対的な公式にはきつと逆らえない。

「カフェオレじゃなくて、ブラック。」

「だーめー。子供はコーヒーだけ飲んだら胃に刺激が強すぎるって前になんかで言ってた!」

「“なんかで言ってた”って信じにくいわ、しかも子供なのは陽菜だけだろ。」

「総ちゃんと誕生日半年しか変わらないから、わたしが子供ならあなたも子供です。」

「大人と子供の境目がその半年にあるーの。1月生まれまでは大人。」

「なにその理屈。総ちゃんだけずるい。」

「へりくつ。大人はずるいもんなの。」

「自分でも分かってるんじゃない!全然大人じゃないよ。」

いつも通りの軽口を叩きながら総一郎と並んで校門を出る。

ずっとこのままでいられないなんて信じたくないけど、その現実
目を閉じられるほど自分を信じていないから今の幸福をしっかりと
覚えていようと思う。

総ちゃんが離れていってしまっ、わたしから関心がなくなるんじや
ないかっていう不安に目をそむけてもしょうがないのは分かっている
けど、まるで味のなくなったガムを顎が痛くなっても噛み続ける
みたいに、そのいやな予感を吐きだせずに持ち続けているしかない。

せめて「いま」が少しでも永く続きますように。

チーズタルトを買います（後書き）

いつまでもお話が進展しなくてほんとすいません。

総ちゃんはやく陽菜の友達に恋して…。

あらすじと違う方向に進みすぎて手に負えない

悲しんだりしません

「もうすぐ体育大会だね、何に出るか決めた？」

みつちりと総一郎に数学を教え込まれた帰り道、自分の右肩を左手で揉むと鈍い痛みがじわりと広がる。隣を歩く総一郎を見上げると、うつん、と軽く唸って総一郎はちらりとこちらを見降ろしてにやりと笑った。

「大縄跳び。」

「それ全員参加だから。」

1年生は学年競技として大縄跳びをすることにきまっている。みんな大縄跳びともう1つ個人競技とかに出ないといけない。

総一郎なら、リレーに出る！と自分で言わなくてもクラスのみんなが持ちあげるのどうせリレーも出ることになるんだろうけど、今から言つと嫌がったらいけないので黙っておく。私といえば、そんなに運動ができる方でもないのに綱引きとかの個人の力がためされない団体競技に出ようと思っていた。

「おし、じゃー玉入れにする。」

歩きながらアスファルトから見えない布の球を拾ってまるでバスケットのシュートのようにスローイングする。全然玉入れの投げ方っぽくないけど、それで入るんだろうか。

「玉入れってね、何個か一緒に投げたら入りやすいんだって。」

慣性ほ法則かなんとかがはたらくから、とテレビで言っていた。ほんとだよ、と少し疑うように総一郎は目を細めて笑うと少し大きなものをもつような手つきでそれを宙に浮かせた。

玉入れの時間は何時頃だったっけ、とこの間配られた体育大会のスケジュールと、過密に詰め込まれた自分の当日のスケジュールを思い返しながら歩いていると駅まで到着した。

駅には部活帰りだろうか、遅い時間なのにけっこうな人数の生徒がいて電車を待っている。

「あつ、加藤くん！」

かわいらしい声で呼ばれたその言葉が、総一郎を呼ぶ声だと判断するまでに少し時間がかかってしまった。

反応できないまま視線をうつさなかったわたしのことをえ気にも留めずにその子は話し続けていた。

ゆつくりと、不自然じゃないようにそちらを向くと隣のクラスの女の子が総一郎ににっこりと笑顔をむけている。

話したことはないけど、うちのクラスに来て総一郎と話しているのを何回か見たことがある。

たしか、周りから「みいちゃん」と呼ばれていた。猫みたいでかわいいのは名前だけじゃなくて、総一郎にかけるその声も心地いい高さで甘い。先生に見逃してもらえないくらいにぱっちりと施されたお化粧はその子の瞳をまるく大きく彩っていた。

ふとその視線がこちらを見る。

「あ、山崎さんだね？私、隣のクラスの中川です。」

いやみなくらいにつこりと、こちらを見て笑ってみせるその子を見てすぐに気がついた。

さりげなく添えたその手は総一郎の制服の腕を軽くつかんでいる。

「総ちゃんの、彼女さん？」

彼女の前に（新しい）と心の中で付け加えながら、わたしはその仕事をする自分が幼く見えるとわかった上で軽く首を傾けて、上目遣いに中川さんを見上げた。その質問に総一郎の答えはいらないし、総一郎が言い訳じみたことを言うことも言う必要もない。だってわたしと総ちゃんは、ただの幼なじみだから。

高校に入ってから初めての彼女だ。この間までは誰とも付き合っていないかったはずだから、付き合いだしたのは本当にきのう、今日のことだろう、なんてしっかりと推測してみた。ちょうど反対側のホームに滑り込んできた電車を見たらその窓に映っているわたしの顔はいつもと同じ愛想のいい笑顔で、今日もさすがだなんて独りで自分を褒めてみる。

「えへへ、恥ずかしいな。」

中川さんはちらちらと総一郎を見上げながら微笑む。その表情に言葉通りの恥ずかしさなんて感じられない。

恋する女の子がかわいって、誰が言ってたんだっけ。

総一郎の新しい彼女が浮かべる笑顔は、学校の王子様と付き合えたことと、その総一郎の一番近くにいたわたしを出しぬけたことへの

優越感だろうか。

わたしの顔に張り付いている笑顔は、中川さんに対する嫉妬だなんて単純なものじゃなくて。

「じゃあわたし邪魔しないように友達と帰るね。」

ホームのさらに奥にクラスがいつしよの女の子3人組を見つけた。そこまで仲がいいわけじゃないけど、笑顔で名前を呼べばきっと迎え入れてくれるだろう。

総ちゃんが一言も話さないことも、隣から視線を感じることも、全部わたしには関係のないことだ。

「ごめんね、一緒に帰ってたのに。」

悪いなんて思っていないのに中川さんがそう言うのを聞きながら、笑顔のままでわたしは首を振った。

「じゃあ、また明日ね。中川さん……総ちゃんも。」

いつも通り。総一郎に彼女ができたってわたしの立ち位置は変わらない。

だから別に悲しくなったりしない。
『こんなこと』で陽菜は嫉妬なんてしない、総ちゃんにもそう思っていてほしい。

今まで総一郎が選んできたタイプのかわいらしい女の子と、また総一郎が付きあったからってどうして悲しくなる必要があるの？

今までもこれから、そんな女の子たちなんかよりもわたしを優先してくれた。

今日だって。

もしあの子と別れて！って言ったら総一郎はわかれてくれるだろう。でもそんな馬鹿みたいなことを言って、その瞬間だけ総一郎をしばって、何になるって言うんだろう。

そんな風に執着するわたしを、総一郎はどう思うんだろう。

「あー、陽菜ちゃん！今帰り？」

同じクラスの友達が近付いたわたしに気づいて声をかけてくれる。

「うん、ちょっと寄り道してて。みんな部活？」

そっだよー、とうなずき返してくれた友人たちの視線が、私を通り越してホームの端に注がれる。

総一郎と中川さんを見ているんだろう。

「えへ、お邪魔だから逃げてきちゃった。一緒に帰って！」

できるだけから元気を装って言う。わたしは隣のクラスの女の子に総一郎を横取りされたケナゲな女の子じゃないといけない。

同じクラスの3人は眉を寄せて顔をしかめたり、よしよしとわたしの頭をなでくれたり、横からぎゅうつと抱きしめてくれる。女の子って同一の敵がいると結束するものだ。うちのクラスの総一郎くんが隣のクラスのぶりっこに取られるなんて！っていう心情だろう。

こうやってなぐさめてもらうと、やっぱりわたしは傷ついてないんだって自覚する。

あの子はきつと長くて3か月くらいだから、夏休みの間は総ちゃんフリーだろうな、なんて嫉妬よりもひどいことを考えていた。

総ちゃんが彼女と長続きしない理由のひとつに、わたしの存在があるのは知ってる。けど「離れてあげる」なんて言わない。総ちゃんが、「離れて」って頼むまで、わたしから離れて行ってなんてあげない。

たとえば、今まで付き合ってきたような子じゃなくて。総一郎の内面の弱さに気づけるような子と付き合うことになったら。

あの家に独りきりのとき、わたしじゃなくその子と呼ぶんだろうか。その子がわたしと離れてって頼んだら、わたしはもういらないうって言われるんだろうか。

そんなときは永遠にこなくていいのに。わたししかいない、わたしが一番って思っても言い出せない弱さが総一郎に好きになってもらえない原因なんだろうか。

どれだけ総ちゃんを想ったって、自分自身を愛せないわたしを、総ちゃんは愛してくれない。

ホームに來た電車に乗り込んで、できるだけ総一郎のことを頭から排除してクラスメイトの話に耳をかたむける。

総ちゃんに彼女ができててもかわらないけど、周りはやっぱりわたし

を不憫だと思っただろう。あの調子じゃ中川さんは休み時間のたびに総一郎に会いに来るだろうし、あの子と別れるまで教室でも周囲に気を使われる毎日が待っていると思うと少し憂鬱になった。

きつと一緒に帰ったりもするだろうから、これからは総ちゃんという時間が減ってしまう。

そのせいか、さみしいって感じたけれど、まるで遠く離れてしまうみたいだったから、その感情はなかったことにした。

いつだって一番近くにいるのはわたしなんだから、傷ついたりなんかしない。

悲しんだりしません（後書き）

前の更新からけっこう空きました・・・。

総ちゃんに彼女！

ほんとあらずじにたどりつかないすぎてびっくりです。

のろろ更新の上にぐだぐだですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6409v/>

かわいい悪魔の言うとおり

2011年12月16日18時59分発行